

Title	近代における人形浄瑠璃の表現に関する研究：作品論、上演史、奏演法の視点から
Author(s)	多田, 英俊
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57851
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【40】

氏名	多田英俊
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第23494号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	近代における人形浄瑠璃の表現に関する研究—作品論、上演史、奏演法の視点から—
論文審査委員	(主査) 教授 天野 文雄 (副査) 教授 永田 靖 教授 市川 明

論文内容の要旨

本論文は近代における人形浄瑠璃(文楽)の「表現」を、「作品論」「上演史」「奏演法」という3つの視点から論じて、近代の人形浄瑠璃が近世からの流れをいかに継承したかを考え、最終的に、大正末期～昭和初期頃を境とする豊竹山城少掾を中心とする人形浄瑠璃の大きな質的変化を跡づけようとしたもので、字数は120万字あまり、400字詰原稿用紙に換算して、670枚あまりの論文である。

本論文は3章と附章とからなっていて、第1章「作品論—「引窓」をめぐる—」では、寛延2年(1749)に大坂竹本座で初演された『双蝶々曲輪日記』四段目の「引窓」の段をとりあげて、その「引窓」の段の解釈には近代に重要な変化があったこと、その変化をもたらしたのは理知的、心理主義的な語りで一世を風靡した豊竹山城少掾の存在であったことを、従来の「引窓」研究、劇評、聞書、大阪市立中央図書館蔵の鶴沢清六遺文庫の清六の書き入れになる浄瑠璃本などによって論証している。第2章「上演史—「序切跡」の視点から—」では、時代物浄瑠璃三大狂言『仮名手本忠臣蔵』『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』を中心に、初段、二段目、三段目、四段目、五段目という五段構成になる浄瑠璃の序段の最後の場面である「序切跡」の形成と性格を論じたもので、序切跡ははじめから一つの場面とされてはいなかったこと、三大狂言のうちでは『仮名手本忠臣蔵』と『菅原伝授手習鑑』の序切跡が江戸後期に一場面としての位置づけがなされていたのたいして、『義経千本桜』の序切跡が一場面として定着したのは近代になってからであること、序切跡は他の段の跡が「後始末」的な場面であるのたいして、以後の展開についての暗示や期待感を抱かせる機能を有していること、などを指摘している。第3章「奏演法—「クドキ」をめぐる—」では、主人公がしんみりと心情を訴える場面の語り口である「クドキ」をとりあげ、昭和初期以前にはクドキに認められた「つ」を「tsu」ではなく「tu」と発音する語り方が現在ではほとんど消滅していることを指摘して、近代における奏演法の変化の一端を提示し、また、クドキを得意とした竹本越登大夫の語りを記録したレコード「鴻池依囀盤」の全容の解明に努め、その越登大夫の後援者だった鴻池家十一代目の当主である善右衛門幸方の浄瑠璃愛好の姿勢と、幸方次男で浄瑠璃研究に携わった鴻池幸武のそれとの違いを、近代人形浄瑠璃の大きな変化の象徴ともしている。

また、「附章」として、いずれも既発表の高等学校の教材としての浄瑠璃についての論考1本と劇評2本が付せられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、以上のように、「作品論」「上演史」「奏演法」という3つの視点から、『双蝶々曲輪日記』の「引窓」の段の解釈をめぐる変化、五段構成をとる時代物浄瑠璃の「序切跡」の形成、「クドキ」をめぐる近代浄瑠璃における一大変化について論じ、近代の人形浄瑠璃における前代からの継承と変化という重要にして大きな問題を論じたものであるが、本論文では、3つのテーマそれぞれにおいて周到で手堅い論が展開され、浄瑠璃研究のなかでは比較的研究が手薄な近代人形浄瑠璃研究に貴重な成果をあげたものと評価できる。とりわけ、研究上の重要な指摘としては、豊竹山城少掾の「引窓」の解釈が寛延2年の竹本政大夫以来の「風」を継承していたこと、その山城少掾の「引窓」が理知的な解釈に変わって、それが現在の「引窓」理解に及んでいること、『義経千本桜』の序切跡「夜討」の一場面としての位置づけが幕末、明治、大正期の上演を通して定着したこと、それに照らすならば、現在の「夜討」を独立した場面としない現在の『義経千本桜』の演出は見直す必要があること、浄瑠璃にたいする理念において対極に位置する鴻池父子への着目、など

がある。また、本論文は方法という点においても、600点を越える鶴沢清六遺文庫の資料の活用、義太夫節の音楽性を重視した結果の音楽面からのアプローチ、浄瑠璃資料としてのレコードの活用という方法面においても多角的であり、それによって今後の浄瑠璃研究のあり方を示した点でも高く評価される。また、本論文には、近代浄瑠璃研究としては当然のことながら、現代あるいは将来の文楽はどうあるべきかという関心が根底にあり、それが本論文をいっそう深みのあるものになっている。

一方、本論文には、論の重複、ごく一部だが曖昧な記述などがあり、また、第3章における鴻池幸武の仕事についてはさらに踏み込んだ考察がなされるべきであったと思うが、それらは部分的なものであり、全体としては清新な近代浄瑠璃研究と評価できる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。